

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520441

研究課題名(和文) ドイツ語心態詞と日本語終助詞の発話における心的態度と韻律的特徴について

研究課題名(英文) Prosody of German Modal Particles and Japanese Sentence-Final Particles in Attitude Utterances

研究代表者

生駒 美喜 (Ikoma, Miki)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：90350404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語の会話には、日本語終助詞と似た機能を持ち様々な意図を表す心態詞が用いられる。本研究は、「反論」などの意図を示す心態詞の発話を対象に、その発話のイントネーションなどの韻律的特徴、終助詞の発話のイントネーションとの共通点および相違点を明らかにすることを目的とし、ドイツ語母語話者によるドイツ語心態詞の発話、日本語を母語とするドイツ語学習者の発話、日本語母語話者による日本語終助詞の発話の分析を行った。その結果、「反論」を示すドイツ語の心態詞の発話に特有の韻律的特徴が見られたが、個々の心態詞で異なる特徴も見られた。また、日本語終助詞の発話において、心態詞の発話と一部共通する韻律的特徴が見られた。

研究成果の概要(英文)：In German, modal particles are usually used to express speakers' intentions, whereas in Japanese the same function is often performed by sentence-final particles. This study investigated the universal and language-specific prosodic features of German modal particles conveying speakers' attitudes, such as "refutation", uttered by both native German speakers and Japanese learners of German, and sentence-final particles in similar-meaning Japanese utterances spoken by native Japanese speakers. There were common prosodic characteristics for the German modal particles expressing "refutation", but each of these modal particles also had other, different characteristics. These common prosodic characteristics were also partially observed in the Japanese sentence-final particles.

研究分野：言語学、音声学、ドイツ語教育

キーワード：ドイツ語 心態詞 韻律的特徴 音声 終助詞 話し言葉

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語の会話においては、ja, denn, doch, schon などの心態詞と呼ばれる語が頻繁に用いられる。これらは、日本語の終助詞と類似した機能を持つとされ、一つの心態詞が状況によって「反論」「軽い批判」や「驚き」などの様々な心的態度を表す。

研究代表者はこれまで、ドイツ語心態詞 ja, doch, schon, denn それぞれに特有の韻律的特徴と意味・機能の関係について研究を進めてきた(Ikoma, 2007; 2011; Ikoma und Werner, 2011)。これらの研究の結果、個々の心態詞において、異なる発話意図を示す発話にはそれぞれ特有の韻律的特徴が見られた。また、アクセントの置かれる心態詞、アクセントが置かれない心態詞の中でも、異なる発話意図によって持続時間やピッチなどに固有の特徴が現れることが明らかになった。さらに、「反論」や「驚き」などの共通する心的態度を示す異なる心態詞を含む発話において、基本周波数(ピッチ)などの点で類似した特徴が見られていた。

ドイツ語心態詞は、1つの心態詞が状況によって異なる心的態度を表すことから、ドイツ語非母語話者にとっては正しい意図での発話と知覚が大変困難である。では日本語を母語とするドイツ語学習者がドイツ語心態詞を含む「反論」などの心的態度を正しく発話しようとする際、何を手がかりにすれば良いであろうか。

一方、日本語の終助詞を含む発話においても、その発話意図によって特有の韻律的特徴が現れることが明らかにされてきている。日本語終助詞を含む発話とドイツ語心態詞を含む発話における韻律的特徴に共通する特徴、もしくはそれぞれに固有の特徴が明らかになることで、日本語を母語とするドイツ語学習者に、ドイツ語心態詞を含む心的態度を表す発話のより正しい習得への手がかりを効果的に示すことができるのではないだろうか。

以上のことから、本研究では、ドイツ語心態詞を含む発話における心的態度と韻律的特徴との関係をより明らかにし、さらに、日本語を母語とするドイツ語学習者の発話とドイツ語心態詞を含む発話と同一の状況下での日本語終助詞を含む発話の韻律的特徴と比較することで、心的態度を含む発話においてドイツ語、日本語にそれぞれ固有の韻律的特徴と、ドイツ語と日本語に共通する韻律的特徴を解明していくことを目的とする。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者のこれまでの研究成果をふまえ、ドイツ語心態詞および日本語終助詞の発話における心的態度と韻律的特徴との関係を明らかにする。具体的には以下の点を目的とする：

(1) ドイツ語心態詞における心的態度には、どのような韻律的特徴が見られるか。

- (2) 日本語終助詞における心的態度には、どのような韻律的特徴が見られるか。
- (3) 上記(1)(2)における韻律的特徴のうち、どの韻律的特徴が母語話者による心的態度の知覚に重要か。
- (4) 日本語を母語とするドイツ語学習者のドイツ語心態詞の発話にはどのような特徴が見られるか。ドイツ語母語話者の発話との共通点・相違点はあるか。
- (5) 同じ心的態度を表す発話において、ドイツ語心態詞を含む発話と、日本語終助詞を含む発話に共通する韻律的特徴は見られるか。日本語、ドイツ語それぞれに固有の韻律的特徴は見られるか。

3. 研究の方法

(1) 「反論」の心的態度を示すドイツ語心態詞の韻律的特徴(生駒, 2014)

心態詞の先行研究において、反論の意図が示される場合、ja, doch, schon はいずれも対照アクセントを持つとされてきた(Abraham, 1991; Meibauer, 1994)。また、研究代表者がこれまでに行った研究において、「反論」の心的態度を示し、異なる心態詞 ja, doch, schon を含む発話中、アクセントの置かれる心態詞の基本周波数のピークが時間的に遅れて生じるなど、類似する特徴が見られている。

「反論」の発話意図は、相手が否定したことを話者が肯定するという点で、対比の状況として捉えることができる。ドイツ語発話における対比フォーカスの韻律的特徴として、対比フォーカスの置かれる部分の基本周波数の最高値(F0ピーク)が高く、時間的に遅く生じることや、基本周波数の変動幅が大きく、音節の持続時間が長くなるとされる(Turco 他, 2013)。

以上をふまえ、この分析では、「反論」の意図を示すとされるドイツ語心態詞 ja, doch, schon を含む発話に共通する韻律的特徴は見られるか、また、先行研究でいわれる対比フォーカスの韻律的特徴と共通した特徴が見られるかを調べるため、短文を用いた発話実験を行い、その音声データを用いて知覚実験を実施した。

発話実験

資料として、ドイツ語の心態詞を含む発話が可能以下の2つの短文 1) Er kommt _____. (彼は来る) 2) Er kommt _____ mit uns mit. (彼は私たちと一緒に来る)を用い、反論を示す対話に埋め込んで状況文を作成した。短文の下線に入る心態詞の選択肢として ja, doch, schon, mal を用意した。

被験者として、ドイツ語母語話者計13名に協力してもらった。被験者にはそれぞれ発話を行う前にどの心態詞を用いるのが自然かアンケートに回答してもらい、その結果すべての被験者が回答した心態詞 doch および schon の発話を分析対象とした。

被験者が心態詞 doch、schon を含めて状況に合わせて朗読した 1)、2) の短文の発話を録音し、音声分析ソフト Praat (Boersma and Weenink, 2013) を用いて音響分析を行い、対比フォーカスに関する先行研究の分析方法に基づいて、基本周波数および持続時間を測定し、それぞれの心態詞を含む「反論」の発話に見られる韻律的特徴を調べた。

知覚実験

発話実験実施の 1 年後に、ドイツ語母語話者 12 名の協力により、の発話データを用いた知覚実験を実施した。実験では、コンピュータ上で各々の被験者にランダムに提示された短文の発話データを合計 3 回聴取してもらい、A) 全く反論ではない、B) 軽い反論、C) 強い反論のいずれかを回答してもらった。

(2) ドイツ語心態詞 schon を含む発話における、「反論」の心的態度を示す発話とその他の心的態度を示す発話の韻律的特徴

上記 (1) の分析において、心態詞 schon を含む発話では当初の予測に反して schon にアクセントが置かれるケースが少なかったことをふまえ、本分析ではドイツ語心態詞 schon を含む発話のみに着目し、発話実験と知覚実験の両面から分析を行い、「反論」の発話における心態詞 schon のアクセントの有無と発話全体の韻律的特徴を調べた。その際、他の意図を表す発話の韻律的特徴と比較するため、Ikoma (2007) にて示された心態詞 schon の発話意図に基づき、「確信」および「留保付肯定」の発話意図についても同様に実験を行った。

発話実験

発話資料としては、研究代表者がこれまでに行った研究の資料を用いた。この資料では、「反論」およびその他の意図として「確信」「留保付肯定」の状況を説明する文に対話文が含まれており、相手が「ペーターは来ないよ」と言ったのに対し、“Peter kommt schon.” (ペーターは来るよ) という話者の応答としての短文が続く。この短文 “Peter kommt schon.” が分析の対象となる。

被験者として、10 名のドイツ語母語話者に協力してもらった。研究代表者のこれまでの研究では、被験者が与えられた状況文を黙読し、会話文の一部を一人で朗読するという方法と取っていた。しかし、心態詞を含む発話は複数の話者が対話するという状況下で行われるのが自然である。したがってこの分析では、互いに良く知っている 2 名のドイツ語母語話者 5 組計 10 名が、それぞれの役割を感情を込めて演じる形で、心態詞 schon を含む発話文を読むという手順で実施した。

録音した音声データは音声分析ソフト Praat を用いて音響分析し、文中のピッチアクセントの位置 (心態詞 schon のアクセントの有無)、GToBI (Grice et al., 2005) によるアクセントタイプ、上記 (1) の分析と同様

に文全体および各音節部分の持続時間と基本周波数を測定した。

知覚実験

「反論」の意図を持つ心態詞 schon を含む発話を母語話者は文脈無しで正しく知覚し、他の意図の発話と区別することができるかを調べるため、上記で録音した音声データを用いて知覚実験を実施した。この知覚実験は研究代表者の所属する早稲田大学の音声学実験室にて行い、6 名のドイツ語を母語とする学生が被験者として参加した。被験者はそれぞれコンピュータ上で提示された音声データを聴取し、1) 確信、2) 留保付肯定、3) 反論のいずれかから最もふさわしいと思われる意図 1 つを選択してもらった。

以上の知覚実験において「反論」として正しく知覚された音声データを中心に、音響分析を再度行い、知覚において重要となる韻律的特徴が何かを調べた。

(3) 日本語を母語とするドイツ語学習者の発話における韻律的特徴

ドイツ語学習者 2 名による schon を含む短文の朗読音声の音響分析とその評価のための知覚実験 (Ikoma, 2016)

日本語を母語とするドイツ語学習者の心態詞を含む発話にどのような韻律的特徴が見られるか、ドイツ語母語話者による発話の韻律的特徴と共通する部分はあるかを調べるため、Ikoma und Werner (2011) における発話資料および手順にて、2 名のドイツ語学習者を被験者として発話実験を実施した。被験者はドイツに 1 年間留学をしており、留学前の 2012 年および留学帰国後の 2014 年に同様の実験を行い、留学前後で発話の韻律的特徴に違いが見られるか調べた。上記 (2) の発話実験と同様、状況文の中に対話が含まれており、相手の言ったことに対して Peter kommt schon (ペーターは来るよ) という短文で応答する形となっている。Ikoma und Werner (2011) では、「確信」「留保付肯定」「反論」の 3 つの心的態度に加え、「驚き」も含まれており、これら 4 つの心的態度を示す発話を分析対象とした。Ikoma und Werner (2011) と同様の手順にて朗読した音声データを音声分析ソフト Praat を用い、1) 文全体の基本周波数の最大値、2) 文全体の基本周波数の変動幅、3) schon 部分の基本周波数の最大値と変動幅、4) schon の持続時間を調べた。

上記で録音した音声データについて、評価のための知覚実験を実施し、上記 4 つの心的態度のうち最もふさわしいと思われる意図を選択すると同時に、発話の理解度を 1 (理解できない) ~ 5 (理解できる) の尺度で回答してもらった。

ドイツ語学習者 3 名を対象とする留学前中後の会話調査

日本語を母語とするドイツ語学習者がドイツ語の発話にどの程度心態詞を用いるの

か、またその頻度は留学前、中、後で異なるのかを調べるため、ドイツ語学習者3名を対象に、研究協力者と共同で会話調査を実施した。ドイツ語学習者3名はいずれも、2012年秋～2013年夏の1年間、ドイツに交換留学をしている。この会話調査では、留学前の2012年7月、留学中の2013年3月、留学から帰国後の2013年9月の計3回にわたり、A)簡単な自己紹介などの会話、B)あるテーマについてのディスカッション、C)心態詞を含む対話文の朗読、を各学習者がドイツ語母語話者とペアで対話をする形式で行った。録音した会話調査の音声を書き起こし、出現した心態詞を調べた。

ドイツ語学習者による心態詞 schon を含む対話における韻律的特徴

上述の発話実験とは別の2名の日本語を母語とするドイツ語学習者を被験者として、上述(2)の発話実験と同一の発話資料および手順にて対話形式の発話実験を実施した。この2名のドイツ語学習者は、(4)の日本語終助詞の発話実験においても被験者として参加している。日本語における心的態度を含む発話の韻律的特徴をより明らかにするため、日本語を母語とする同一話者による、ドイツ語心態詞を含む発話と、日本語終助詞を含む発話の韻律的特徴を比較した。

(4) 様々な心的態度を示す日本語終助詞「よ」を含む発話の韻律的特徴

ある心的態度を示す日本語終助詞を含む発話における韻律的特徴は、同じ心的態度を表すドイツ語心態詞を含む発話の韻律的特徴とはどのような点で異なるのか、共通点があるのかを明らかにするため、本分析では、ドイツ語心態詞 schon の分析(2)に用いたドイツ語心態詞 schon を含む短文 Peter kommt schon. を日本語に訳した「ペーターは来るよ」という短文を用い、(2)と同一の状況、心的態度を対象に分析を行った。

被験者は(3)の述べた日本語を母語とするドイツ語学習者2名である。この2名はいずれも3年間ドイツ語を学習した後、1年間ドイツで交換留学をした経験がある。この2名には、(2)の分析方法に述べた手順と同様、対話文をそれぞれ役割を交替しながらその状況に置かれたつもりで感情を込めて読んでもらった。

録音した発話を音響分析し、日本語終助詞および感情と音声に関する先行研究(森他, 2014)を参考に、各音節の持続時間および基本周波数を調べた。

4. 研究成果

(1) 「反論」の心的態度を示すドイツ語心態詞の韻律的特徴(生駒, 2014)

先行研究において、「反論」の発話では doch, schon いずれも心態詞に対比アクセントが置かれるとされてきた。さらに、研究代表者のこれまでの研究からも、「反論」という共通

する心的態度を持つ発話において、異なる心態詞 doch, schon を含む発話の韻律的特徴には共通の特徴が見られると予測していた。しかしながら分析の結果、予測に反し心態詞 doch, schon を含む発話において、それぞれ下記の通り異なる傾向が見られた(生駒, 2014: 127f.):

心態詞 doch を含む「反論」の意図の発話では多くの場合 doch にアクセントが置かれていた。「反論」として知覚した doch を含む発話では F0 最大値が高くなったが、母音の持続時間は短くなっていた。F0 ピークのタイミング、F0 変動幅には特に目立った特徴は確認されなかった。心態詞 schon を含む「反論」の発話では、多くの場合 schon にアクセントは置かれず、動詞部分にアクセントが置かれていた。75%以上が「反論」として知覚した schon を含む発話では、ピッチピークまでの持続時間が伸びており、ピッチピークが遅く生じるほど、反論として知覚されることがわかった。また F0 変動幅が小さいほど反論として知覚される場合もあった。

本分析では、doch を含む発話のピッチピークが高く、schon を含む発話のピッチピークが遅れて生じるという点で、対比アクセントに関する先行研究と類似する韻律的特徴が見られているが、先行研究と異なり、doch の母音が短く、schon のピッチ変動幅が小さいという特徴も見られた。また、当初の予測に反し、心態詞 schon の発話において、schon にアクセントが置かれるケースが少なかった。これらの結果をふまえ、(2)の分析では、心態詞 schon における「反論」の意図を示す発話に着目して分析を進めた。

(2) ドイツ語心態詞 schon を含む発話における、「反論」の心的態度を示す発話とその他の心的態度を示す発話の韻律的特徴

発話実験の結果

発話実験の音声を音響分析した結果、「反論」を示す音声データの70%において、心態詞ではなく動詞部分 kommt にピッチアクセントが置かれていることが明らかになった。動詞 kommt にアクセントが置かれる「確信」と「反論」の発話について、音響分析の結果を統計的手法を用いて比較した。その結果、「反論」の発話において、発話全体の持続時間および各音節の持続時間が長く、発話全体のピッチピーク(基本周波数の最高値)が「確信」より低く、アクセントの置かれる動詞 kommt において開始部分のピッチが低く、ピッチピークが高く、ピッチの変動幅が大きくなっており、kommt の母音開始部分からピッチピークまでの持続時間が長くなっていた。

知覚実験の結果

の発話実験の音声データによる知覚実験の結果、「反論」の発話の正答率は50%であった。心態詞 schon にアクセントがある

「反論」の発話はすべて「反論」として正しく知覚されていた。一方、schon にアクセントが置かれぬ「反論」の発話のうち2つの発話データにおいても50%以上の正答率が得られた。これら2つの「反論」の発話データのみに関して、再度音響分析の結果を統計処理して調べたところ、文全体に対するschonの持続時間の比率が「確信」の音声データと比較して長いことが分かった。このことから、「反論」を示す発話において、心態詞にピッチアクセントが置かれぬ場合、上述の韻律的特徴に加えて心態詞schonの持続時間が正しく「反論」と知覚されるために重要な手がかりとなっていることが示唆された。

以上の分析結果により、対比アクセントに関する先行研究で述べられてきた韻律的特徴である、ピッチピークの高さおよび遅さ、ピッチの変動幅の大きさが、「反論」を示す心態詞schonの発話にも見られることが明らかになった。また、知覚に重要な手がかりとして、心態詞にピッチアクセントが置かれぬ場合であっても、心態詞の持続時間が長くなるという可能性が示唆されたが、該当するデータの個数が少ないため、データを増やして再検証する必要がある。

(3) 日本語を母語とするドイツ語学習者の発話における韻律的特徴

2名の日本語を母語とするドイツ語学習者による心態詞schonを含む様々な意図を示す発話の音響分析の結果、「確信」の発話において、ドイツ語母語話者による同じ意図の発話と比較して発話全体のピッチピークが高くなる傾向が見られた。また、「驚き」の発話においては、ドイツ語母語話者と同様に、ピッチの変動幅が大きくなるという共通の特徴が見られた。「反論」を示す発話においては、日本語学習者の発話はドイツ語母語話者の発話と同様に、アクセントが置かれる部分のピッチピークが高く、ピッチの変動幅が大きくなるという特徴が見られた。

学習者の発話を評価のため母語話者に聴取してもらった結果、留学後のすべての音声データにおいて、正しい意図として聴取された比率(正答率)が留学前の発話データと比べて上がっていた。中でも、「反論」を示す発話では最高で55%の正答率が得られた。但し、理解度は最高でも1-5のうちの3であり、アクセントの位置が違っているなどの理由で、理解度は留学後の発話においても低い結果となった(Ikoma, 2016)。ドイツ語学習者の発話にはドイツ語母語話者と一部共通する韻律的特徴が見られたことから、今後データを増やして検証し、ドイツ語母語話者とは異なる部分についてより明らかにするため、さらに分析を進めたい。

会話調査で転記した文字データを調べた結果、留学前にほとんど見られなかった心態詞が、留学後の発話において若干数出現して

いることが分かった。但し、その使用頻度は学習者によって差が見られた。この発話データについては、ドイツ語母語話者の会話データとも比較しながらより詳しい分析を進め、学習者音声における心態詞の発話の音声的特徴を明らかにしていきたい。

(4) 「反論」の心的態度を示す日本語終助詞「よ」を含む発話の韻律的特徴

「確信」「留保付肯定」「反論」の3つの心的態度を示す「ペーターは来るよ」という発話を音響分析した結果、「反論」において、文全体および各音節の持続時間が他の2つの意図における発話と比較して長くなっていた。また、「反論」において、文全体のピッチの変動幅が大きく、ピッチピークが高くなっていた。以上の結果は、ドイツ語心態詞schonを含む「反論」を示す発話と共通している。また、「ペーターは」および「来るよ」のそれぞれ最初のピッチの値が、「確信」と比較して高くなっていた。「よ」の部分については、「留保付肯定」の発話の「よ」の部分が、「確信」および「反論」に比べてピッチが高く、「よ」のピッチパターンが下降調ではなく平板に近い形をしていた。この点については、ドイツ語の心態詞schonを含む同じ意図を示す発話と比較し、さらに詳しく調査していきたい。また、終助詞「よ」には他にも様々な発話意図があると言われており、schon以外のドイツ語心態詞を含む同一の心的態度を含む発話とも比較しながら、日本語終助詞を含む様々な心的態度を示す発話の韻律的特徴を明らかにし、ドイツ語心態詞を含む発話と共通する特徴および特有に持つ特徴をさらに明らかにしていきたい。

<引用文献>

- Abraham, Werner (1991). "Discourse Particles in German: How does their Illocutive Force Come About?" Abraham, W. (ed.) *Discourse Particles: Descriptive and Theoretical Investigations on the Logical, Syntactic and Pragmatic Properties of Discourse Particles in German*. Amsterdam: John Benjamins, 203-252 頁.
- Boersma, P. and Weenink, D. (2013) *Praat: doing phonetics by computer* [Computer program]. Version 5.3.53, retrieved 1. August 2013 from <http://www.praat.org/>
- Grice, M., Baumann, S. and Benz Müller, R. (2005). "German Intonation in Autosegmental-Metrical Phonology." In: Jun, Sun-Ah. (ed.) *Prosodic Typology: The Phonology of Intonation and Phrasing*. Oxford University Press, 55-83.
- <http://typo3-8540.rrz.uni-koeln.de/>

fileadmin/Phonetik_Files/pdf_publications/Grice_Baumann_Benzmueller-German_Intonation_in_Autosegmental-metrical_Phonology_2005.pdf
(15.05.2017)

Ikoma, Miki (2007) *Prosodische Eigenschaften der deutschen Modalpartikeln*. (Schriftenreihe PHONOLOGIA, Band 103). Hamburg: Dr. Kovač.

Ikoma, Miki (2011) "Prosodie der Partikel schon in Produktion und Wahrnehmung" In: JGG (Hgg.) *Mapping zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur: Akten des 37. Linguisten-Seminars, Kyoto 2009*. München: Iudicium. 55-69 頁.

Ikoma, Miki und Werner, Angelika (2011) „Prosodie und Bedeutung der Partikel schon.“ 岡本順治 / Werner, Angelika 編『心態詞の音声と意味 新しい研究手法の開発にむけて』日本独文学会研究叢書 075. 日本独文学会. 7-24 頁.

Meibauer, Jörg (1994). *Modaler Kontrast und konzeptuelle Verschiebung: Studien zur Syntax und Semantik deutscher Modalpartikeln* (Linguistische Arbeiten 314). Tübingen: Niemeyer.

Turco, G., Dimroth, C. and Braun, B. (2013) "Intonational means to mark Verum focus in German and French." *Language and Speech*, 56, 460-490 頁.
森大毅 / 前川喜久雄 / 粕谷英樹 (2014) 音声は何を伝えているのか: 感情・パラ言語情報・個人性の音声科学 (音響サイエンスシリーズ 12) 日本音響学会編、コロナ社.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Ikoma, Miki (2016) "Produktion und Wahrnehmung der deutschen Modalpartikel schon durch japanische Deutschlernende." In: Zhu, J., Zhao, J. und Szurawitzki, M. (eds.) *Germanistik zwischen Tradition und Innovation. Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015*. Band 4. Peter Lang. 253-259 頁. 査読無.

生駒美喜 (2014) 「『反論』の意図を表すドイツ語心態詞を含む発話の韻律的特徴について」第 28 回日本音声学会全国大会予稿集. 123-128 頁. 査読無.

生駒美喜 (2013) 「ドイツ語の話しこと

ばの音声教育 - ドイツ語心態詞を用いた音声の学習者による知覚と発話 - 」新倉真矢子編『ドイツ語音声教育の現状と可能性』日本独文学会研究叢書 090 日本独文学会. 26-37 頁. 査読無.

[学会発表](計6件)

Ikoma, Miki. Prosodie und Bedeutung der unbetonten und betonten Modalpartikel schon. 口頭発表. 日本独文学会第 44 回語学ゼミナール. 2016 年 8 月 31 日. 多摩永山情報教育センター (東京都多摩市).

Ikoma, Miki. Produktion und Wahrnehmung der deutschen Modalpartikel schon durch japanische Deutschlernende. 口頭発表. XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG). 2015 年 8 月 28 日. 同済大学 (中国、上海).

生駒美喜. 「反論」の意図を表すドイツ語心態詞を含む発話の韻律的特徴について. ポスター発表. 第 28 回日本音声学会全国大会. 2014 年 9 月 27 日. 東京農工大学小金井キャンパス (東京都小金井市).

生駒美喜 / 牛山さおり. ドイツ語心態詞を含む発話における韻律的特徴について. ブース発表. 2013 年 9 月 28 日. 第 69 回日本独文学会秋季研究発表会. 北海道大学 (北海道、札幌市).

[その他]

ホームページ等

<http://www.modalpartikeln.jp/moodle>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生駒美喜 (IKOMA, Miki)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号: 90350404

(4) 研究協力者

牛山さおり (USHIYAMA, Saori)

東京藝術大学・音楽学部・非常勤講師